

世界モンゴル俳句の創作・翻訳に関する実践と考察

日本ウェルネススポーツ大学 富川力道

モンゴル文学において、HAIKU は、1960年代中ごろモンゴル国の大詩人・B・ヤボーホランによって紹介され、かつ HAIKU という名称で創作されたのが初めてだと言われている。その以来現在まで HAIKU という短詩は断続的ではあるが、モンゴル文学の世界で、モンゴル詩人たちによって創作または翻訳が行われてきた。しかし、いわゆるモンゴル三行詩と HAIKU を同等に考える傾向や一定の条件で異なる短詩として取り扱う傾向がある。両者の間に線引きをするのは難しいが、世界モンゴル俳句は後者の立場を取っている。

世界モンゴル俳句とは、世界の五大陸でそれぞれの言語によって書かれている自由律俳句の流れを汲み、モンゴル語によって創作されている HAIKU である。日本の俳句は、第二次世界大戦後イギリスの文学者レジナルド・ブライスが英語圏に紹介したことがきっかけで、HAIKU として世界的に広まるようになったと言われている。モンゴル語による俳句が世界俳句の仲間入りをしたのは 2006 年に世界俳句協会主宰『世界俳句』誌に和訳モンゴル俳句を掲載したから始まった。2016 年に発足した世界モンゴル俳句会は世界モンゴル俳句の創作・翻訳に力を入れている。

従来 of モンゴル三行詩は基本的にモンゴル人読者向けに書かれるのに対し、世界モンゴル俳句は世界各地の読者を想定して、かつ外国語に翻訳され、国際的俳句誌に掲載されることを視野に入れて創作・翻訳されるものである。そのため、モンゴル俳句の創作は翻訳と言う作業を想定しなければならず、モンゴル三行詩よりもさらに言葉を凝縮し、目の前の情景やそこで瞬間的に感じた喜怒哀楽などの描写、そして一つの展開に示し、句の中に取り入れる情報が少ないほどいいなどの一定の制約も出てくる。たとえば、「世界の三つ」の伝統を引く三つの事物を並列して描写するモンゴル三行詩は詩作としての完成度が高くても、HAIKU として翻訳するのは至難の業で、翻訳する際にはその一つまた二つの事物の内容を省略せざるを得ない。しかし、少ない言葉で一つの展開を呈する短詩または HAIKU は翻訳しやすく、しかも HAIKU としての表現効果が得られる。一例を挙げておく。

原作	Noiriin dunduur Namaig hazzan ter shumuul Nil ulaan gerel samarsaar
添削	Noiron dund Namaig hazzan * shumuul * hatgasan でもいい Nil ulaan (u'ur zalgana-作者追加)
和訳	夢の中刺した蚊の真っ赤な夜明け

この句は、睡眠中に蚊が真っ赤になるほど血を吸って、(満足げに)夜明けを迎えていると、「蚊」を主人公に立てているが、実際は蚊に刺されて、なかなか快適に眠れなかった一夜の苦しい気持ちを詠っている。原作の中の「ter」(あの)は余分の言葉で、「Nil ulaan gerel samarsaar」(真っ赤な光を泳ながら)というのは、時間的感覚が曖昧で誇張的表現である。筆者の指摘後に、作者はそれらを削除し、

「夜明けを迎える」という語を加えた。それによって作者の寝付かなかった苦し
くて長い時間と蚊への嫌悪感が伝わってきた。

これは「蚊」という一つの展開で物語を作っている点で立派な HAIKU である。
俳句の暗示力も感じられる。それはまさに世界モンゴル俳句が目指す「言葉の凝
縮」「一つの展開」「翻訳の想定」という新しい志向性である。

「俳句は50カ国以上で愛され広がる世界文学」である（夏石番矢・世界俳句
協会編『世界俳句』2019. №15）。世界モンゴル俳句は、モンゴル文学にお
ける斬新なジャンルとして、また世界文学としての HAIKU の一環としてモンゴル
文学の新しい境地の開拓を試みている。